

幼児の砂遊びの発達過程 —遊びの構造と展開に注目して—

川村学園女子大学

箕輪潤子

要 約

本研究では、幼児同士が行なう「山作り遊び」と「穴掘り遊び」に注目し、砂に対する様々な行為と幼児同士の相互作用が、年齢によって如何に発達していくのかを検討した。その結果、次のことが明らかになった。3歳児では、幼児同士がお互いに行為の真似をすることで、行為の仕方を学んでいる。4歳児では、行なうべき行為とそのタイミングを理解しており、その上で幼児同士がお互いに行為を見合い、役割を分担しながら、遊びを展開していく。5歳児では、行なうべき行為とそのタイミングを理解しているだけでなく、行為にバリエーションがあることや、役割分担を暗黙のうちに行なったり、お互いに行為を見合ったりしながら、複雑な遊びを展開する。

【キー・ワード】 砂遊び, 砂場, 共同遊び, 3-5歳児

Abstract

In this study, Japanese 3-5 years old children who play with sand (making sand mountains and holes) are observed. As the result, 3 years old children learn nature of sand by playing with sand, and they learn how to make mountain and hole with sand by watching their peers who play with them. 4 years old children have knowledges about nature of sand and skills to make sand mountain and holes. They also have social skills to cooperate with peers for making mountains and holes. 5 years old children cooperated each other for making sand mountains and holes by dividing some works.

【Key Words】 China, Child with Autism, Early Diagnostics and Identification of Autism, M-CHAT

1. 問 題

幼稚園や保育園では、砂遊びをする子どもたちの姿が日常的に見られる。砂遊びが子どもに満足をもたらすことは一般的に広く知られている。従来、幼児期の遊びに関する研究は、ごっこ遊びを対象としたものが主であった。しかし、ここ数年で、砂遊びの歴史や砂と砂遊びの性質、砂遊びをする子どもの経験についてなど、砂遊びに関する研究が少しずつ行なわれてきている。例えば、松本（1993, 2007）や石井（1990, 1993, 2007）、笠間（1999, 2001, 2007）は砂遊びの特徴について、可変性や可塑性を持つ砂が多様な遊びを産むことや、「こわす・つくる」など相対する2つの性質を同時に

存在させる「あいまい性」を持つことなどを示唆している。そして、小川（2000）は子どもが砂と出会うことについて検討し、砂遊びの特徴として、繰り返しが多いことや子ども同士の会話が少ないことを明らかにしている。幼児同士の砂遊びの特徴を検討した箕輪（2006）は、砂に関わる行為や変化した砂の状態を介して、やりとりによって遊びが展開することや、1つの対象に関わることが幼児同士の遊びを支えることなどを明らかにしている。更に、共同遊びの成立過程や遊びにおける行為などの観点から分析を行った研究では、砂遊びの特徴として、テーマや役割が砂の状態変化に応じて決められること（無籐, 1995）や、行為の流れが環境に起こす変化に次の行為の可能性の幅を見ることで、行為が連鎖すること（細田, 1999）などを、明らかにしている。但し、砂遊びの時間的展開や幼児同士の相互作用、年齢による違いなど、明らかになっていないことも多い。特に、保育者が幼児の仲間関係や発達の状況に応じた援助を行うためには、社会的能力が特に発達する時期である3～5歳児を対象に、幼児同士の相互作用や発達の観点から研究を行う必要がある（箕輪, 2007）。

幼児同士の砂遊びにおいては、ままごと遊び、山作り遊び、穴掘り遊び、それらを複合した遊びなど、多様な遊びが展開されている。本研究では、幼児同士の相互作用や砂に対する様々な行為により、砂遊びが如何に展開していくのかについて「山作り遊び」と「穴掘り遊び」に注目して、どのような砂遊びにも見られる特徴と遊びによって異なる特徴について発達の検討を行なうことを目的とする。

2. 方 法

<研究協力者・観察期間・観察方法>

2005年4月～7月の4ヶ月間、都内国立大学付属T幼稚園の砂場にて、自由遊び時間に3歳児（23名）、4歳児（54名）、5歳児（56名）が、各年齢に分かれて設置されている砂場（注1）で砂遊びをする様子を、ビデオで記録し同時にメモを取った。観察日数は10日間（1回につき1時間～2.5時間）で合計19時間である。なお、子どもの人数は在園児の人数であり、本文中の名前は全て仮名である。

<分析方法>

最初に、分析枠組みについて述べる。これまでの砂遊びに関する先行研究において、砂遊びを見る独自の枠組みは提示されていない。そこで、これまで多くの研究が行われ、幼児同士のやりとりに含まれる内容を見る視点を提供しているごっこ遊びの先行研究から、ガーヴェイ（1977）の概念を用いて分析を行なうこととする。ガーヴェイは、子ども同士のやりとりの内容に「プラン：動きや話の筋書きを決める動作系列のレパートリーで、日常生活の経験に基づく」「役割：日常生活において出会った人の一般的な動きをもとに、自分とは異なる人物を演じること」「物（の見立て）：プランや役割に沿って、モノを別のモノに見立てて扱うこと」「状況設定：実際の状況とは異なる架空の状況を作り出すこと」が含まれると述べている。このガーヴェイの概念を用いて、幼児同士の砂遊びの特徴を検討した箕輪（2006）は、砂遊びには、(1) 遊びの種類に関わらず、やりとりの内容には「プラン」と「役割」、もしくはそれらに相当するものが含まれること。やりとりの内容における「物（の見立て）」「状況設定」の有無は、遊びの種類によって異なること (2) 「構成を伴う遊び」「ごっこの要素

を含まず、構成を伴わない遊び」では、「プラン」「役割」「物（の見立て）」「状況設定」の性質がごっこ遊びのものとは異なること の2点を示すことで、砂遊びとごっこ遊びの特徴が異なることを明らかにしている。本研究においても、ガーヴェイの概念を援用することで、遊び方や砂に関わる行為を分類する研究や、時間経過に伴う行為の変化を分析する研究とは異なり、砂遊びにおける基本的な枠組みの性質を年齢ごとに検討することで、年齢ごとの砂遊びの特徴を明らかにできると考えられる。但し、箕輪（2006）は、山作り遊びが「構成を伴う遊び」であり、「構成を伴う遊び」における「プラン」「役割」「物（の見立て）」「状況設定」の性質は、ガーヴェイがごっこ遊びにおいて見られると指摘したそれらの性質とは異なることを指摘している。そこで、本研究ではガーヴェイの概念を援用して事例を分析するが、「プラン」「役割」「物（の見立て）」「状況設定」の性質は、箕輪の定義に従うこととする。なお、砂遊びには、砂との関わり方や遊びの展開の仕方によって「ごっこの要素を含む遊び」「構成を伴う遊び」「ごっこの要素を含まず、構成を伴わない遊び」の3種類があると箕輪（2006）は述べているが、今回は「構成を伴う遊び」に焦点を当て、「山作り遊び」と「穴掘り遊び」について検討する。

次に、分析方法について述べる。観察した10日間のビデオから幼児の言動を記録に起こし、幼児同士で砂遊びをする様子が含まれる場面を年齢ごと、遊びの種類（山作り遊び、穴掘り遊び）ごとに選択した。更に選択した場面から筆者が各年齢について特徴を導き出し、最も典型的にその特徴がよく見られたと判断した場面を分析する。分析は、各年齢の事例について、各遊びの展開過程を整理した上で、幼児同士のやりとりの内容に含まれる「プラン」「役割」「物（の見立て）」「状況設定」の性質について検討し、各年齢の砂遊びの特徴を考察する。

3. 結果と考察

<研究1> 山作り遊び

(1) 遊びの流れ

3歳児の遊びの流れは「砂を掘りすくい出していく→砂が盛り上がる→砂を固めたり、（たまに）乗せたりする→山ができる」である。（網かけ文字は、子どもが砂に対して行為を行った結果、起きた砂の変化を示す）。4歳児の遊びの流れは「（保育者が山の基礎を作る→砂が盛り上がって山の形ができる）→砂を乗せたり固めたりする→山が大きくなっていく→更に砂を乗せたり固めたりする→更に山が大きくなっていく→トンネルを掘る→トンネルができる→水を流す」となっている。5歳児の遊びの流れは「（前に掘った穴から）砂を掘り出し、（前に作った山に）砂を乗せたり固めたり、白砂をかけたりする→山が大きくなる・穴が広がったり深くなる→更に（前に掘った穴から）砂を掘り出し、（前に作った山に）砂を乗せたり固めたり、白砂や土をかけたりする→更に山が大きくなる・更に穴が広がったり深くなる→トンネルを掘り始める→トンネルができる→山を壊す」となっている。

(2) プラン、役割、物（見立て）、状況設定

	3歳児	4歳児	5歳児
プラン	<p>山作りに最低限必要な「積み上げる」「固める」という基本的な行為が成立。但し、主に「固める」行為を行っているため、山は大きくなっていない。</p> <p>道具を用いず手を使って行為を行っている（山を作る際の道具の使用に慣れていないだけでなく、砂の感触を手で感じたり、形を変える砂の性質を視覚や触覚で確かめたりしていると考えられる）。</p> <p>殆どの行為は、他児の行為の真似をすることで起きている。</p>	<p>「積み上げる」「固める」という基本的な行為をバランスよく行っているため、山も大きくなっている。また、山ができるトンネルを掘る遊びが展開されている。</p> <p>山を作る際にはスコップのみ使用しているが、トンネルを掘る際に道具を選んでおり、目的や砂の状態に応じた道具の使用ができることがわかる。なお、穴を掘る際には、操作レベルで行為の仕方（深く掘る）を変えている。</p> <p>行為を行う時期を、他児の様子や山の状態を見て決めている。</p>	<p>「積み上げる」「固める」行為をバランスよく行い、行為を行う際には、乗せる砂の量や固める時の力加減など操作レベルで行為の仕方を変えている。山の状態や他児の動きをみながら、どの行為をどれだけ行なうかや、行為のペースなどを決めている。そして、山が完成した後は、「トンネルを掘る遊び」「山を壊す遊び」と変化しており、1つの対象を共有しつつながらも、遊びの内容を変化させている。</p> <p>常に、行為や操作に応じて、道具を選択しているだけでなく、乗せる砂の選択も行なっている。</p> <p>行為を行う時期を、他児の行為や山の状態によって決める。</p>
役割	<p>遊び始めてからしばらくは、個々に自分の山を作っており、役割分担はみられない。しかし、保育者が子どもの遊びを認める言葉かけをしたことを機に、1つの山を2人で作り始める。</p>	<p>子ども達は1つの山を行為の対象として共有している。山を作り始めてしばらくは、全員で「積み上げる」行為を行い、砂が積み上がってくる「積み上げる」子どもと、「固める」子どもに分かれている。トンネルを掘る時には、掘り始める時に役割を分担している。役割分担を行っている時には、他児の様子に応じて声をかけ、相手を気遣い必要に応じた協力を求める様子が見られる。</p>	<p>遊びの開始時から、暗黙のうちに役割分担を行い、状況に合わせて自分の役割を暗黙に引き受ける様子が見られる。</p> <p>子ども達は相手の状況に沿ったやりとりや、必要に応じた援助の要請を行っている。特に、仲間に援助を求めるときには、行為や行為を行う場所を具体的に伝えており、援助を求められた側の子どものも要求に沿った行為を行っている。また、援助の要求自体も、仲間全体の利益となるような要求を行っている。更に、手を休める時には仲間に伝えてから休むなど、仲間との協調を保とうとする様子や、他のグループと一線をひくような言動により、仲間意識を強めたり確認したりする様子も見られる。</p>
物（見立て）	<p>構成した山に対し、言葉で「山」という命名はしていないが、砂の山が実際の山とは異なる点では、子どもたちの心内では見立てを行っている可能性があり、見立てが行われていないとは言いきれない。</p>	<p>構成した山に対し、言葉で「山」という命名はしていないが、砂の山が実際の山とは異なる点では、子どもたちの心内では見立てを行っている可能性があり、見立てが行われていないとは言いきれない。但し、トンネルを掘った後、水を注ぎできた穴に対して「海」と命名し、見立てを行なっている。</p>	<p>掘った穴を「川」に見立てている。更に、かざおは「川」に見立てた穴と、ともやが掘っている穴との間に関係を見いだし、ともやが掘っている穴に「海」という見立てをしている。役割分担を行って複数の物を作るようになることで、構成物同士の関連性を見出し出している。</p>

<p>状況設定</p>	<p>見立てを行っているかを言葉で判断できないため、状況設定が見立てと結びついたものであるというガーベイ（1977）の定義に従うと、状況設定が行われているかも判断できない。なお、山を構成している点では、子ども達はその場を山と判断している可能性もある。</p>	<p>子どもたちは構成した山に対し、言葉で「山」という命名をしていないものの、子どもたちの心内では、山に対しても見立てを行っている可能性がある。 但し、トンネルを掘った後、水を注ぎできた穴に対して「海」と命名することで、穴の周辺に海という状況を設定して遊ぶ様子が見られた。</p>	<p>2つの穴を「川」と「海」に見立てることで、穴の周辺に状況を設定している。そして、山は遊びの対象として機能しているだけでなく、遊びの拠点としても機能している。長い間砂場を離れても山のある場所に戻っていることから、4歳児クラスの幼児以上に、5歳児クラスの子どもにとつての山は、拠点としての意味が強くなっていると考えられる。</p>
-------------	---	--	--

(3) 考察

砂場での山作り遊びにおいて、3歳児クラスの子どもたちは、他児や自分が起こした砂の変化や偶然起きた砂の変化を、身体感覚を通して十分に経験しながら、山作りに必要な素地（行為の仕方の獲得、砂の性質の理解）。4歳児クラスの子どもたちは、仲間と1つの対象を共有し、山作りに必要な基本的な行為をバランスよく行ったり、行為に応じた道具を選択したりしながら、意図的に山を作り上げたり、山ができた後にトンネルを掘ったりしている。そして、5歳児クラスの子ども達は、仲間と1つの対象を安定して共有し続け、変化する山の様子を見ながら基本的な行為をバランスよく行うだけでなく、「どの部位を固めるのか」など操作レベルでの行為の使い分けを行ったり、行為や操作に応じた道具や砂の選択を行ったりする。また、山を作りながら穴を掘ったり、山を作った後にトンネルを作り、更に壊したりするなど複雑な遊びを展開する。子どもたちは砂遊びを通して、場であり関わる対象である砂という素材を経験し、その経験を更に次の砂遊びへと生かしていくと考えられる。そして、砂遊びにおいて一人で遊ぶことと他児とともに遊ぶことは、単純に別の状況として説明できないと考えられる。3歳児クラスの子ども達は、一人で砂という素材の性質や変化を十分に経験することと、他児の行為を真似る経験をすることを、相乗させながら山の作り方を学んでいくと考えられる。4歳児クラスの子ども達は、全員で同じ行為を行ったり役割分担をしたりしながら1つの山を作る経験を通して、個々の子どもが砂に関する知識を深めたり目的に沿う行為の仕方を身につけたりすることで、更に仲間と協力して山を作ることが可能になると考えられる。そして、5歳児クラスの子ども達は、個々の子どもが持つ砂に関する知識や技能を仲間との遊びにおいて発揮できるようになり、効率よく山作りをするために役割分担を行い、より多様で複雑な展開の遊びをするようになると考えられる。

<研究2> 穴掘り遊び>

(1) 遊びの流れ

3歳児では水平方向に穴を掘る遊びのみが見られる。遊びの流れは「バケツに砂を集めるために、地面から砂を掘りすくい出していく→穴ができていく→更に深く掘っていく→穴が深くなっていく→穴を固める」である。穴掘り（水平方向に掘る）遊びの流れは「山を作る→トンネルを掘る→トンネルができる→水を流す」となっている。つまり、山を作ったことで、子どもたちは水平方向に穴を

ほりはじめ、「トンネル」を作っていると言える。穴掘り（垂直方向に掘る）遊びの流れは「穴を掘る→穴ができる→掘った穴に水を入れる→水を入れた穴を海に見立てて遊ぶ」となっている。5歳児の遊びの流れは「(以前作った山に掘ったトンネルや穴から) 砂を掘り出していく→穴が広がったり深くなったりする→更に砂を掘り出すと同時に、水を流す→更に穴が広がったり深くなる。穴に水がたまる。→保育者が声をかける→今までと違う場所を掘り始める→穴が繋がって、水が全体的に流れる」となっている。

(2) プラン、役割、物（見立て）、状況設定

	3歳児	4歳児	5歳児
プラン	<p>穴を掘る動きは、「掘る」と「(砂を) 出す」という、「穴掘りのプラン」を成立させる基本的な行為のみから成り立っている。但し、子どもたちの遊びは、他の子どもがしていることを見たことによって始まっている。</p> <p>穴を掘っている子どもたちは、行為を行う際に手だけでなくスプーンやシャベルなどの道具を用いている。このことは、遊びによっては3歳児でも砂に対して道具を使って行為を行うことができることを示している。但し、スプーンで一度にすくえる砂が少ないことや、砂を集める時に主に手を使っていることから、まだ十分には道具の使用になれていないことや、道具を行為する上での効率を考慮して選択するというよりも、それぞれの子どもが使いたいものを選択していることが伺える。</p>	<p>トンネルを掘る遊び、穴を掘る遊びの両方で、「掘る」「(砂を) 出す」という行為の組み合わせから成り立つ「穴掘りのプラン」が見られる。トンネルを「掘る」行為は、操作レベルでは「水平方向に”深く”掘る」動きとして行われている。一方で、穴を掘る遊びでは、「垂直方向に”深く”掘る」動きとして行っている子どもと、「垂直方向・水平方向に”浅く”掘る」動きとして行っている子どもがおり、前者は穴を深くし、後者は穴を広げることへと結びついている。</p> <p>トンネルを掘る際にも、穴を掘る際にも道具を選んでおり、目的や砂の状態に応じた道具の使用ができることがわかる。</p>	<p>「掘る」「(砂を) 出す」という行為の組み合わせから成り立つ「穴掘りのプラン」が見られる。子ども達の動きは「掘る」行為として行われているが、操作レベルでの掘り方は、どの子どもについても、トンネルを掘るのか、穴を深く掘るのか、穴を広げるように掘るのかによって異なっている。なお、操作レベルでの行為は、トンネルを掘る時には「水平方向に”掘る”動き、穴を深くする時には「垂直方向に”深く”掘る」動き、穴を広げる時には「垂直方向・水平方向に”浅く”掘る」動きとして行なわれている。そして、道具の選択に関しても、スコップ、シャベル、シャベルを2本と使い分けをしている。更に、狭い場所から多くの砂を出す時や、シャベルで掘りにくい場所を掘る時などに手を使っている。</p>
役割	<p>他児の遊びを真似することで、遊びが始まっているが、遊びの開始後は、子どもごとにそれぞれ別の行為を行い、協力する様子も見られる。子どもたちがお互いの動きをみながら自分の次の動きを決めていることがわかる。「穴を掘る」という目的に対しての明確に役割分担があるとは言えないが、今後遊びにおける目的がより意識されるようになると、役割分担が明確に行われるようになることが予想される。</p>	<p>トンネルを掘ることを思いついた子どもが、他児に対し掘る場所を指示している。山の両側から掘り進めることで、効率よくトンネルを掘ることができることを子どもたちが理解していることが伺える。</p> <p>また、穴を掘る遊びでは、子ども達が1つの穴を一緒に掘ることによって、穴を深く広くして行っている。その点で、それぞれが役割を分担している。</p>	<p>子ども達は穴を掘り始めるときから、一緒に遊ぶことを意識している。基本的にこの遊びでは、水を流す子どもと、穴やトンネルを掘る子どもに分かれて作業を行っており、役割分担が行なわれている。更に、穴やトンネルを掘っている子どもたちは、穴の広がり具合や、水の回り具合、他児の動きなどをみながら、暗黙に掘る穴（トンネル）の場所や、掘り方などを決めている。</p>

<p>物 (見立て)</p>	<p>事例において、子どもたちは穴に対し「穴」とは言っているものの⑥、それが見立てと言えるのかは不明である。しかし、子どもたちの心内では見立てを行っている可能性があり、言葉での命名がないからと言って見立てが行われていないとは言いきれない。</p>	<p>トンネルを掘る遊びでは、「ここに、トンネルつくろ」と言っていることから、山に掘った穴をトンネルに見立てていることがわかる。 穴を掘る遊びにおいても、掘った穴に水を注ぐことによって、1人の子どもが水を注いだ穴を「海」に見立て、その見立てを、他の子どもたちも了解している。なお、子どもたちは「海」を作るために穴を掘ったのではなく、穴を掘っていくうちに水を注ぐことを思いつき、水を穴に注いだ結果、水を注いだ穴の状態から「海」を思いついたのだと考えられる。</p>	<p>特に穴に対して、命名を行っていないわけではない。しかし、子ども達は心内でなんらかの見立てを行なっている可能性がある。特に、トンネルに関しては、山に掘った繋がった2つの穴を「トンネル」と呼ぶことが子どもたちにとって当然のこととして了解されていると考えられる。そして、山に掘ったトンネルや穴に水を流していることから、子どもたちが山やトンネル、穴をひとつの風景としてのまとまりとして見ている可能性が高く、風景として子どもが捉えることで、掘った穴を「川」や「海」に見立てていると考えられる。</p>
<p>状況設定</p>	<p>見立てを行っているかを言葉で判断できないため、状況設定が見立てと結びついたものであるというガーベイ（1977）の定義に従うと、状況設定が行われているかも判断できない。</p>	<p>トンネルを掘る遊びにおいては、トンネルに見立てた穴が、山に掘られている。子どもたちは構成した山に対し、言葉で「山」という命名をしていないため、トンネルを掘った山の周辺に「トンネルのある山」という状況設定を行っているかは不明である。但し、子どもたちの心内では、山に対しても見立てを行っている可能性がある 水を注いだ穴を海に見立てることにより、乗り物の遊具を浮かべたり、遊具を走らせたりする遊びを始めている。つまり、子ども達はその場に対し「海」という状況を設定していると言える。なお、子どもたちは、「海」と関わりながら、もしくはその周囲で遊んでおり、穴を掘っていたときと同様に穴を拠点として共有していることがわかる。</p>	<p>トンネルに見立てた穴は、山に掘られている。子どもたちは構成した山に対し、言葉で「山」という命名をしていないため、トンネルを掘った山の周辺に「トンネルのある山」という状況設定を行っているかは不明である。但し、子どもたちの心内では、山に対しても見立てを行っている可能性がある。更に先に述べたように、山の周辺にはつながった穴が掘られ、そこに水が流されていることで、子どもたちはその一帯を風景として捉えていると考えられる。</p>

(3) 考察

砂場での穴掘り遊びにおいて、3歳児の穴掘り遊びは、時に「集める」という遊びと結びつくことで生まれる可能性をもっている。子どもたちは単に「穴を掘る」ことだけに留まらず、道具を試したり、砂の変化や他児の動きによって、様々な遊びの展開の可能性を学んでいったりしている。4歳児クラスの子供達は、1つの対象を共有しながら、作業を分担する。トンネルを掘る遊びでは、トンネルを掘るという目的を共有し、2カ所から穴を掘ることで効率よく作業をすすめることができる。また、穴を掘る遊びでは、全員で一斉に掘ることで、より深く広い穴を作ることができる一方で、一緒に穴を掘ることができていれば、操作レベルでの行為の仕方については個々の子どもに委ねられて

いる。そして、穴を掘った後には、水を注ぐなど新たな遊びの展開を起こすなど、ただ穴を掘るに留まらず、多様な遊びを展開させることができる。そして、5歳児クラス子ども達は、作った山にトンネルを掘ったり、山の隣に穴を掘ったりしている。掘る際には、掘る場所を分担し、それぞれの子どもが操作レベルで行為の仕方を変えたり、道具の選択を行ったりしている。但し、掘る場所を分担していても、他児が掘っている場所や、他児が掘ることで変化していく穴の状態をみながら、自分が掘る場所や、どのように掘っていくかを決めている。4歳児が掘っていた穴が1つだけであったのに対して、5歳児は複数の穴を掘っている様子が見られる。子どもたちは砂遊びを通して、場であり関わる対象である砂という素材を経験し、その経験を更に次の砂遊びへと生かしていくと考えられる。

4. 総合的考察

本研究では、様々な内容の遊びが展開される砂遊びの中でも、山作り遊びと穴掘り遊びについて、遊びの展開や子ども同士のやりとりにおける発達の差異を検討した。以下、山作り遊びと穴掘り遊びの共通点と差異点を明らかにする。

3歳児の山作り遊びでは、「積み上げる」「固める」という行為のバランスがとれておらず、山が大きくならなかった(箕輪, 2007)。穴を掘る遊びに関しては、「掘る」行為をした後に必ず「捨てる」行為が行なわれている点で、行為のバランスがとれないという様子は見られなかった。但し、用いる道具や力のかけ具合などによって、あまり深く穴を掘ることはできていない。なお、3歳児の穴掘り遊びは「(砂を)集める」という行為の延長線上に起きており、砂遊びにおける子どもの行為や行為が結びつく遊びの傾向は、年齢によって異なることが示唆される。次に、4歳児の山作り遊び(箕輪, 2007)も、穴掘り遊びも、1つの対象を共有して、共同で構成を行なっている点は共通している。しかし、道具の使い分けをしていたり、操作レベルでの「掘る」行為が子どもによって異なる点では、道具の使い分けや操作レベルでの行為の使い分けが見られなかった山作り遊びとは異なると言える。最後に5歳児の場合、山作りのみ、穴掘りのみを行なうのではなく、山作り遊びをしているうちに穴を掘り始めたり(箕輪 2007)、山を作った後にトンネルや穴を掘って水を注ぐなど、遊びを組み合わせる様子が見られる。操作レベルでの行為の使い分けや道具の使い分けなども4歳児以上に行なわれており、砂遊びをする際の掘り方や道具の選択の仕方などについての多様な知識と技術を獲得していることが伺われる。但し、穴掘り遊びについては、1つの山を作る山作り遊びとは異なり、掘る場所が子どもによって違う様子が見られ、作業だけではなく作業をする場所の分担もすすんでいる。これらのことから、穴を掘る遊びは山を作る遊びよりも、子どもたちにとって行ない易い遊びであることが伺われる。なお、子どもの発達によって、行為の傾向が変化したり、操作レベルでの行為のバリエーションが増加したりすることで、遊びの内容や展開が異なっていくことが示唆される。

これまでに遊びや仲間関係の発達を検討した研究は多く行われてきたが、本研究は砂遊びという特定の遊びについて、年齢ごとの特徴を検討したことに意義があると考えられる。砂遊びの発達の傾向に応じて、保育者が提供する遊具の選択を行うなど、援助を行うための示唆となると考えられる。

最後に今後の課題について述べる。本研究は穴掘り遊びの発達の検討を行い、年齢ごとの特徴を明

らかにした。ごっこの要素を含む遊びにおいても、年齢ごとに特徴があると考えられることから、それらの遊びについても発達の検討を行った上で、内容を越えた砂遊びの発達の検討を行う。

<引用文献>

- 石井光恵（1993）砂場をめぐる子どもたち. 発達. 54, pp. 58-64.
- 石井光恵（1990）幼稚園における砂遊びに関する一考察. 日本女子大学紀要 家政学部. 37, pp. 17-22
- 小川清実（2002）砂遊びの構造－出会いの種々相 小川博久編「遊び」の探求－大人は子どもの遊びにどうかかわりうるか. pp139-164. 生活ジャーナル.
- Garvey, C. (1977) Play. Harvard University Press. 高橋たまき訳（1980）ごっこの構造－子どもの遊びの世界 育ちゆく子ども 0才からの心と行動の世界 6. サイエンス社.
- 細田直哉（1999）幼児の「遊び」の生成過程－エコロジカルアプローチ－. 東京大学教育学研究科総合教育科学専攻教育学コース修士論文. <未刊行>
- 笠間浩幸（2001）砂場と子ども. 東洋館出版社.
- 笠間浩幸（1998）こどもの遊び環境としての<砂場>. 環境教育研究 北海道教育大学環境情報センター.1, pp. 113-124,
- 松本信吾（1993）子どもはなぜ砂遊びに魅きつけられるのか. 発達. 53, pp. 48-57
- 箕輪潤子（2006）幼児同士の砂遊びの特徴.保育学研究. 44, pp. 82-92
- 箕輪潤子（2007）砂場における山作り遊びの発達の検討. 保育学研究 45, pp. 42-53
- 箕輪潤子（2007）幼児の穴掘り遊びの発達の検討. 川村学園女子大学紀要 19 (2). 39-54
- 無藤隆（1996）幼児同士の遊びの成立過程－砂場遊びの分析－. 子ども社会研究. 2, pp3-17

